

# 加齢研ニュース

平成 28 年 12 月 1 日  
東北大学加齢医学研究所  
研究会同窓会発行

## 【所長室便り】

川 島 隆 太

早いもので加齢研所長を拝命してから2年半が過ぎました。今年の年末に所長選挙があり、次年度は新体制での船出となります。所長としての自己評価は、予算が年々減らされていく大変厳しい状況の中、概算要求の獲得、動物実験施設の新営など、まずまずやれる範囲でやれることはやったかなと思っています。あと半年、第三期中期目標期間中の加齢研の立ち位置を揺らぎないものとすべく、努力を続けたいと思っています。

と、建前から始めましたが、本音を言えば、財政破たんを回避するため、第三期中期目標期間中に痛みを伴う改革をする決断を待たなしで強いられますので、私はまだよかった。次期所長と、そのまた次の所長は、間違いなく苦しい日々を過ごすことになるので、とても気の毒にと思っています。特に人件費の削減によるダメージは深刻で、加齢研では3年ごとに基礎系

分野を1つ減らさないと収支が保てない状況がずっと続いています。次年度より本学は、より財政的自立を求められる「指定国立大学」の認定を受けるべく動いていますので、人件費を含む運営費交付金の削減は当面止まらないでしょう。教授が退職しても、人件費不足で後任人事ができず、年々、組織が疲弊、退縮していく未来が見え隠れしています。

平成27年度の研究活動についての部局評価も、昨年度同様に、大きなネガティブコメントもなく、運営費交付金の総長裁量による再分配も最上位グループでした。しかし、今年度の校費の分野配分は昨年度の約半額しかできませんでした。研究所の「老化」を一気に進める環境が整いつつあります。全国の国立大学間で、大学内では部局間で、誰かが斃れるまでの我慢比べ、スケープゴートが出て混乱が社会問題化し、霞が関や永田町がいったん立ち止まるまでのチキンレースをしている感がしてなりません。

とはいえ、座して死を待つのは、いつでも誰

## 加齢研ニュース 第66号 目次

所長室便り (川島 隆太) .....	1
分野紹介 (老年医学分野) .....	3
追悼 (岡田 克典) .....	5
随想 (岡村 大治) .....	6
研究員会便り (林 陽平) .....	8
所内人事消息 .....	10
研究会同窓会広報 (高井 俊行) .....	11
編集後記 .....	13

でもできます。加齢研自体をスマート・エイジングさせるため、現執行部では最大限の努力を続けてきました。その結果、いくつか、新たな将来への布石を打つことができました。

まずは、スマート・エイジング学際研究重点拠点の発足です。学際研究重点拠点とは、本学の多様な研究領域を、部局の枠を超えた新たな研究拠点として形成し、戦略的研究の推進や新興・融合分野など新たな研究領域を開拓するとともに、世界トップレベルの研究成果を創出するための研究活動を効果的かつ戦略的に推進することを目的とする組織です。昨年度末に32の提案の中から、8つの拠点が認定されました。新たな研究領域を開拓する「学術的インパクト研究群」と、社会的課題に応える戦略的研究を推進する「社会へのインパクト研究群」の2群が設定されていますが、我々の拠点は、その双方からの認定を受けています。

我々の拠点は、加齢研のミッションでもある、スマート・エイジングの実現という目標に向けて、基礎生命科学から人文社会科学に渡る様々な学問領域が丸となって重層的・融合的なアプローチを図り、真に有機的融合科学としての加齢科学の構築を目指すものです。加齢研の4つの研究の柱のうちの2本、加齢の基本的メカニズムの解明を目指す基礎的研究と、認知症の予防を目指す脳の発達・加齢研究を核に、学内関連部局の協力を得て学際研究チームを構築しました。超高齢社会を迎えた我が国にとって、認知症対策は、待ったなしの喫緊の課題です。認知症予防を目指す研究の推進も、我々以外にも多くの研究施設が名乗りを上げ始め、大きな流れになりつつあります。加齢研がこうした研究の世界的な中心であると国内外から広く認知されるべく、研究活動を強化し、外から見えるようにしていきたいと考えています。

10月12日には、第一回のシンポジウムを開催し、実質的な活動をスタートしました。理事・

副学長の臨席のもと、満席の会場で熱い議論が繰り広げられました。拠点の詳細に関しては、ホームページを整備しましたので、是非、お訪ねください

[http://www.idac.tohoku.ac.jp/saro\\_ja\\_site/](http://www.idac.tohoku.ac.jp/saro_ja_site/)

スマート・エイジング学際研究重点拠点の認定を受け、平成29年度概算要求「認知症ゼロ社会実現のための「スマート・エイジング機構」設立事業—認知症の超早期2次予防、一次予防の確立を目指した国際的頭脳循環拠点形成—」を提案し、これが順調に文科省から財務省に上がっています。この「スマート・エイジング機構」は、「スマート・エイジング学際研究重点拠点」と同一組織になります。概算要求申請時は、「機構」の名称でしたが、その後、指定国立大学認証に向けた本部機構での組織名称の整理により、現在の「拠点」を使うことになりました。予算を獲得できたあとは、再び、名称の変更などあるかもしれません。過渡期ですので、小異にはこだわらず実をとりに行きたいと思います。

概算要求は、次年度分より大きく仕組みが変わりました。従来のように、部局からの要求案を大学経由で文科省に提案するのではなく、大学としての戦略目標として一括して文科省に要求を出します。文科省での個別説明などを経て、我々の提案は、東北大学の第3期中期目標期間における機能強化促進分戦略②「独自の最先端研究体制の構築を図り、世界トップレベルの研究成果を創出」の中での概算要求にのりました。前述の8つの学際研究重点拠点のうち、我々と、理学研究科が中心となり提案した拠点のみが、概算要求を出すことができました。

例年通り年末に結果がわかりますが、本学の戦略研究目標としての提案ですので、よほどのことがない限り予算はつくと思います。しかし、大学には、所謂、「袋予算」として、他の概算

要求と共に一括して交付金がおりてきますので、年明けから年度末にかけて、総長や本部財務部との折衝の如何で当拠点の使える予算額が決まります。この折衝が、今年度の所長として、最後の、かつ最大の仕事になるでしょう。

予算獲得後は、第3期中期目標期間内に中間評価などを受け、順調に活動を続けたと認定されると、概算要求期間終了後も学内で組織として継続することが原則となっています。加齢研の生き残り戦略の一つになると思っています。

冒頭で指定国立大学というキーワードが出てきました。指定国立大学は、優秀な人材を引き付け、研究力の強化をはかり、社会からの評価と支援を得るという好循環を実現することとされています。そのため世界の有力大学と伍して、国際水準で競いあう力を持つだけでなく、産学連携など社会との連携を大幅に強化する必要があります。幸い、スマート・エイジング学際研究重点拠点の活動は、社会の出口戦略を明確に設定しており、人類全体の持続的発展に資する社会に関する新たなシステムの提案や産学連携などを展開するという指定国立大学の目標に合致しています。また、これまでの産学連携の実績も、産学連携等の収入でみると、加齢研は過去10年間でダントツの首位、平成27年度の教員個人のライセンス等収入の学内ランキングも一位と二位は加齢研の教員で、三位以下を大きく引き離しています。このままうまく時代の波にのって、組織として飛躍的発展ができるよう頑張りたいと思います。

最後に、知のフォーラムのお知らせのアップデートです。東北大学知のフォーラム「Aging Science: from Molecules to Society」(名称変更しました)は、平成29年5月に予定通り開催いたします。同フォーラムのホームページを開いたいたしましたので、こちらも是非お訪ねいた

だければと思います。皆様のご参加をお待ちしております。

[http://www.idac.tohoku.ac.jp/tfac\\_site/](http://www.idac.tohoku.ac.jp/tfac_site/)

## 【分野紹介】

脳科学研究部門 老年医学分野

### 〈沿革〉

1987年、東北大学医学部附属病院に診療科としての老人科設置が認められ、旧第一内科講師の佐々木英忠氏が初代教授に選任された。続いて、関沢清久(故人)、会川尚志、矢内勝の各医師も旧第一内科から移動。同年11月、東北の地で初めての高齢者医療(Geriatric Medicine)の幕開けとなった。1962年の東京大学老年病科設置から25年目であった。1988年4月には4名の新入医局員を迎え、8名体制となった。当時の(旧)東3階内科共同病棟でのベッド数は22床であった。研究室は医学部3号館10階西側にあった。1998年には、大学院大学への移行に伴い、内科病態学講座 老年・呼吸器病態学分野と改まった。1999年には関沢清久氏が筑波大学呼吸器内科教授として栄転した。2006年6月には内科病態学講座・老年病態学分野となり、2008年学内措置により東北大学附置研究所である加齢医学研究所の新規臨床医学分野となり、荒井啓行が教授に選任され、現在の脳科学研究部門 老年医学分野に至っている。東北大学病院には内科系診療科として「老年内科」を有する。現在、研究室は加齢医学研究所プロジェクト総合研究棟3階、老年科病棟は西病棟15階にある。老年医学分野を核として創設された寄付講座としては、2003年「先進漢方治療医学講座(荒井啓行教授)」、2008年「先進感染症予防学寄附講座(山谷陸雄教授)」、2011年「高齢者薬物治療開発寄附部門(大類孝教授)」、2014年「ニューロイメージング寄附研究部門(工藤幸司教授)」がある。また、

平成 28 年 4 月には新設の東北医科薬科大学教授として、古川勝敏氏（地域医療学）と岡村信行氏（薬理学）を輩出した。

これまでに当分野が主催した全国規模の学会・学術総会としては、第 42 回日本老年医学会（平成 12 年）・第 42 回日本呼吸器学会（平成 14 年）・第 40 回日本臨床生理学会（平成 15 年、以上佐々木英忠会長）および第 59 回日本東洋医学会（平成 20 年）・第 28 回日本認知症学会（平成 21 年）、World-Wide ADNI 会議（同年）、第 6 回日本認知症予防学会（平成 28 年、以上荒井啓行会長）がある。

#### 〈老年科診療の特徴〉

高齢者は異なる背景の疾患を同時に抱え込み、症状の出現が典型的ではないことが多い。老年科は高齢者の生活機能を重視し、包括的な医療を提供する診療科であり、臓器別診療科とは異なる。近年、我が国は平均寿命が急速に伸び、壮年期の疾患の多くが高齢期まで持ち越されるようになったが、このような病気は従来の臓器別診療での対応が基本となる。これに対して、老年医療の対象は、壮年期までは殆んどないが、今日のように高齢化率が 27% を超えるような超高齢社会を迎えて始めて急激に増加し、日常生活機能や生活の質を低下させる（或いはその可能性を持った）特有な病態や疾患である。言い換えれば、長寿を達成したがための新たな医学的課題が生じていると考えられる。老年医学研究は、超高齢社会の到来を背景に老化制御を見据えた新しい感覚の学問である。フレイルな高齢者は生活の自立そのものが脅かされるため、「治す」病院での医療から「支える」地域での介護までが一連のプロセスであることを理解する必要がある。東北大学病院老年科は、四半世紀に及ぶ「もの忘れ外来」の経験と蓄積を有し、認知症の早期診断、漢方治療、分子イメージング研究開発、

アルツハイマー病新薬治験などを推し進めてきた全国でも数少ない専門外来である。

#### 〈分野の将来展望〉

2025 年以降、日本は高齢化率 30% を超える世界一の超高齢国家となると想定される。東北大学附置研究所としての加齢医学研究所のミッションは、この長寿をヒトの一生の普遍的価値として賢く受容する「スマートエイジング」を実現することです。後ろ向きの時間軸が存在しない以上、老化には抗うことはできませんが、老化を制御し、「健康長寿」をもたらすことは可能と考えられる。特に、超高齢社会にあっては「認知症」の問題から目を逸らすことはできません。東北大学病院老年科は、四半世紀にわたり認知症治療薬の市場化に必要なバイオマーカー研究開発において世界を先導する役割を果たしてきた。国家、国民、研究者集団、産業界が国境を越えて力を合わせ、「認知症の発症を抑え、たとえ認知症が増えても壊れない社会」の構築に貢献したいと考えています。

#### 〈写真〉

日本認知症学会と同時開催された第 1 回 World-Wide ADNI 会議（2009 年 11 月 23 日、勝山館にて）。認知症対策は世界共通の課題であるため、国境を越えて経験や知識を共有していくことが確認された。



## 【追悼】

追悼・藤村重文先生

呼吸器外科学分野 岡田 克典

去る平成28年5月28日、東北大学名誉教授で平成10年4月から平成12年3月まで研究所長をお務めになられた藤村重文先生がご逝去されました。本年3月に体調を崩され1ヶ月ほど入院されておりました。一度退院されましたが再入院となり、まもなくご逝去となりました。80歳をお迎えになろうとする間際、私どもにとってあまりにも早いご逝去でした。藤村先生は熱心なカトリック信者でいらっしゃいました、ロヨラ・イグナチオの洗礼名をお持ちです。5月30日のお通夜、6月1日の告別式はカトリック北仙台教会で行われ、たくさんの弔問の方々も参列されました。

藤村先生は昭和三十七年に東北大学医学部をご卒業になり、昭和四十二年に「同種肺移植に関する実験的研究。とくに移植手術手技、移植免疫反応制御法および移植肺機能の研究」により医学博士号を授与されました。以後、肺移植研究の世界的な第一人者として数々の業績を残されました。特に、肺保存液の研究では、後に藤村先生の後任となられた近藤 丘先生、半田政志先生（現・岩手県立胆沢病院副院長）らとともに独自に細胞外液類似組成の肺保存液を開発され、この研究成果は今日世界各国で臨床肺移植に頻用されている肺保存液への開発へと繋がりました。また、臨床においても、特に肺癌手術における気管・気管支形成術や縦隔腫瘍の診療と研究に尽力され、多くの業績を残されました。

先生は、平成元年に仲田 祐教授の後任として東北大学抗酸菌病研究所外科学部門教授に就任されました。教授就任後も、肺移植のみならず肺癌、肺生理学において研究と臨床の両面で顕著な業績を挙げられました。肺癌においては、

集検の有効性に関する評価、喀痰細胞診で発見した早期肺癌のレーザー治療、病期分類、拡大手術、術後化学療法、発がんに関わる遺伝子異常の研究などを指導されました。卓越した指導力は、退官後に主導した厚労省班会議で全国の肺癌診療に関わる医師の英知を結集し、EBMの手法による肺癌診療ガイドラインの初版を完成させる事業において遺憾なく発揮されました。学内においては、平成三年より抗酸菌病研究所附属病院・病院長、平成十年より加齢医学研究所・所長を歴任された後、平成十二年三月に定年により退官されるまで、学術研究、診療、教育の面において多大なご功績を上げられました。そして退官を三日後に控えた平成十二年三月に、日本で最初となる脳死肺移植を成功に導かれた事は皆様ご存知の通りです。先生の業績は見事にこの快挙に結実し、これを基盤とした我が国の肺移植環境の発展により多くの命が救われてきました。このような御功績により、藤村先生は、平成十二年度河北文化賞を受賞されております。教授ご退官後は、東北厚生年金病院・病院長、仙台青葉学院短期大学・学長として、地域医療に尽力され、また医療関係者の育成に精力的に取り組まれました。

先生は、学会活動においても多大なご貢献をされました。平成七年に第十三回日本呼吸器外科学会総会会長、平成八年に第三十八回日本肺癌学会総会会長、平成十年に第五十二回日本胸部外科学会会長を歴任されました。国際学会においても、米国胸部医学会、世界肺癌学会、国際移植学会、米国胸部外科学会などの正会員を務められ、昭和六十三年には、肺移植に関わる基礎的研究により、米国胸部医学会日本支部会長を受賞されております。

私が先生と初めてお会いしたのは、医学部五年生の臨床実習の時でした。私は先生が執刀された高齢の患者さんを受け持たせていただきました。当時先生は助教授でいらっしゃいました

が、私が書いたレポートを自ら熱心に直してくださいました。教授になられてからは、私が初めて執刀した肺切除術、気管支形成術の第一助手を務めてくださり、厳しいながら丁寧なご指導をいただきました。手術がうまくいかず立ち往生していると、「手術はいつか終わる。一ミリずつでも進めば明日の朝には終わる。そういう気持ちで手術しなさい。」と励ましてくださいました。藤村先生はご退官になった後もいつも肺移植の事を気にかけてくださり、お会いすると必ず「この前の移植の患者さんはどうだ」とお尋ねになりました。「大丈夫です。順調に経過しています。」とお答えしますと、本当に安心され、うれしそうに微笑んでくださったことを思い出します。

先生が私どもの教室に残してくださったお言葉に「夢を創る」というものがあります。これは、先生自らが身をもって示された生き方であったと思います。先生がまだお若い頃には臨床応用は不可能とされていた肺移植の研究に果敢に取り組み、それを粘り強く継続され、そして遂に臨床応用の夢を実現されました。教授退官後も、ご逝去の直前まで看護教育、特に生命倫理の教育に情熱を注がれていらっしゃいました。先生のお姿は、いつも私どものお手本でした。

藤村先生のご逝去は、私どもにとってあまりにも早いものでした。しかし、藤村先生は「最後まで仕事をしたい」といつも私どもにおっしゃっていました。ご逝去の直前まで、仙台青葉学院短期大学学長の重責を果たされ、また学会関連のお仕事も継続され、さらに私どもの教室の事、同窓会の事にもお心を砕いてくださっておりました。そのような中でのご逝去でしたので、ご本人はきっと満足されているものと信じております。教え子の一人といたしまして、天国でのお幸せを心よりお祈りしたい、このような気持ちでいっぱいです。

先生、これよりは、どうぞ安らかにお休みください。これまでご指導いただきましたこと、深く御礼申し上げます。ここに心からの尊敬と感謝を捧げ、追悼の辞といたします。

## 【随 想】

### 「まぐろ大学」

近畿大学農学部バイオサイエンス学科  
岡 村 大 治

自虐と誇りを込めて大学自身が大大的に宣伝文句として掲げている、ご存知、近畿大学のあだ名です。「ああ、聞いたことあるわ。」と近大まぐろだけは全国区で認知されつつある一方で、関西以外の地域では恐らくそれしか知られていないのではないのでしょうか。現在私は、ここで講師として教鞭をとっています。2005年1月から2012年3月までの7年間を加齢研で過ごした後、米国サンディエゴのソーグ研究所で3年間ポスドクを経験し、昨年度からここ「まぐろ大学」に奉職しました。加齢研ニュースへの寄稿に際し、私の近況報告も含めこの広報戦略に長けた「まぐろ大学」について語ってみようかと思えます。そこからは、一私立大学にとどまらない今後の大学運営の一つの方向性が見えてくるはずです。

近畿大学の本学キャンパスは東大阪に位置し、多くの学部学科はここに集約されています。現在「超近大プロジェクト」という400億円をかけたキャンパス大規模整備計画が進行中で、無数のクレーンが立ち並ぶ中、新校舎や図書館を建設中です。いわゆるドラマに出て来そうな洗練された大学キャンパス風景が出来つつあり、完成した暁にはもれなく大々的に広告が打たれ、「これ見よがし」に新聞の広告一面を飾ることでしょう。

一方で、まぐろの完全養殖に成功した「水産学科」は実は農学部には属しており、その農学部

は本学キャンパスから電車とバスで30分ほどの奈良の山上にあります。私が所属するバイオサイエンス学科は農学部にある学科の一つです。前述のドラマに出て来そうな風景とは一転し、奈良キャンパスは周囲を山に囲まれた「虫の楽園」です。廊下を移動中に、ムカデだかヤスデだかの多足類と並走するなんて、あまりにも日常。ある朝、校舎の2階に位置する私の事務机の上ででっかいバッタが絶命していた、ぐらゐ多種多様な虫と共存する毎日です。

農学部の各学科は、一学年120-140名の学部生を15人の教員でお世話しています。学部生は3年生になる時点で各研究室に所属され、残りの2年間、多くの講義や実習において分属先の教員から指導を受けるシステムです。うちの研究室は教授と講師の2名体制なので、3-4年の学部生だけで32名が研究室を日常的に出入りしています。名前を覚えるだけでもかなりの時間を要します。学部2年生の後期に行われる分属は、社会でいうところの就職活動に近いものを感じています。「良い人材を取るためにいかにして人気のある研究室になるか」というのが、我々教員側のテーマです。

旧帝大と違い、他大学からの大学院生の入学というのはほとんど望めませんので、この分属が数年後の研究室のアクティビティーをほぼ決定すると言っても過言ではありません。そしてそれに直結するのが、研究室の論文としての業績以上に毎回の講義です。学部の1-2年生にとっては、面白い講義をする教員の研究室がより魅力的に見える傾向があります。僕自身も周到な準備をして講義に臨むのですが、毎回140名の前でオーディションを受けている気分で、未だに講義前日からナーバスになり、毎度お腹を壊してしまいます。

少し話題を変えましょう。奈良キャンパスで行われる、秋の農学部祭は非常に興味深いです。通常、私立大学の大学祭といえば大学生と高校

生で溢れかえりますが、ここは随分様子が違い、地元のおじちゃんおばちゃん、そして家族連れで溢れかえります。第一のお目当は直売所です。近大まぐろの解体ショーと無料試食会と言うに及ばず、直営養殖場から直送されたスーパーには並ばないようなサイズの鯛やイシダイ、シマアジなんかも利益度外視で販売されます。また近大農場で採れた野菜やきのこ類、たくさんの観葉植物も激安で販売されます。そして小さい子供を連れてご家族のお目当ては、学生サークルが主体となって1週間ほどかけて設営される、大規模な「水族館」や「生物展示会」です。そのクオリティーの高さは驚くべきものがあり、今年は50分待ちの行列も出来ました。ユニバ(USJ)の地元愛称)もびっくりの盛況ぶりです。およそ大学祭とは趣の異なる盛り上がりを見せる農学部祭なのですが、私にはここに大学の危機感と戦略が見え隠れするように思えます。広報戦略としてあまり表に出ることはない「地域還元」の姿勢は、長い時間をかけて地元の方々の心象改善につながり、ひいてはその友人・親戚にも伝播され、数年後か十数年後の入学希望者獲得へとつながるのではと感じます。

前述しましたが、近畿大学は非常に広報戦略に長けた大学です。毎日届くプレスリリースの数と内容を眺めていると、内側にいる人間からもそのことを日々強烈に感じます。当然近畿大学の広報部は大学運営の中核なわけですが、その戦略は「シンプルな言葉でとにかく人々の印象に残ること」であり、地方にあることを逆手に取って強烈な関西弁でキャッチーな広告コピーを打ち出します。表記の「まぐろ大学」はその最たるもので、「そんな自虐ネタ、ふつう自分で言うか?」とも感じますが効果は絶大。近大まぐろとまぐろ大学のブランドは、一気に全国区に広まりました。一見すると大学としての伝統もプライドも無いような広報戦略ですが、それが「既成概念に固執しないチャレンジ

精神旺盛な大学」というポジティブなイメージとして捉えられ、広い世代から認知され始めています。

しかし、近大マグロは30年以上に及ぶ研究の賜物としても、所詮は「養殖魚」。まぐろの次の手として目下売り出し中の「うなぎ味のする近大なまず」も、正直どこの大学も抱えてる似たようなコンテンツの一つです。しかしそれを莫大な費用をかけて元日の全国紙の一面を、「近大発のパチもんでんねん。」というキャッチフレーズと共に、どアップのナマズの写真で飾る奇抜さ。東京銀座で近大まぐろを「養殖ものです。」と自信満々で売り出す大胆さ。そのブランディング戦略は痛快そのものであり、大学広告であるにも関わらず、身内ながら思わず笑ってしまいます。そしてそれこそが、近大広報部の狙いそのものなのです。

ここで、皆様は「2018年問題」という言葉をご存知でしょうか？ 少子化により日本の18歳人口が減り始めて久しいのですが、2018年を境にその減少カーブが急激に落ち込みます。現況、私立大学の4割は定員割れだそうですが、もう2-3年も経つと閉校も伴う激変期に突入すること必至です。近畿大学も例外ではありませんし、国公立大学にもその影響は及ぶでしょう。そうなる各大学の存在意義が強烈に問われる時代に突入し、どう社会と向き合いながら大学運営を果たしていくのか、早急に方向性を見出さねばなりません。その点で近畿大学はひとつの好例を見せてはいますが、それは非常にビジネス色の強い、学際教育とは一線を画す運営手法に思えてならないというのが正直な見方でしょう。しかし、恐らくそれは現時点での一過的な立ち位置に過ぎないというのが、私の見方です（運営中枢の本心は伺いしれませんので、あくまで個人的な意見として）。入替え戦のない「関関同立」ブランドをぶっ壊すというのが近畿大学の悲願ですので、それに向けて「マグ

ロとナマズ」を牽引役に据え、キャンパス整備計画等の学際教育に向けての足場固めを着々と進めている様子に思えます。

大学のブランディング。2018年問題を目前にして、そして今後加速度的に進む大学の国際化に向けて、我々「大学人」は否が応でも向き合わなければいけない重いテーマを抱えています。マグロとナマズはその一つの解を示しているのかもしれませんが、そんな難しいことは考えずに来年の大学祭でも美味しく頂きたいと思っています。

### 【研究員会便り】

研究員会委員長 林 陽 平

本年1月から委員長を務めております、医用細胞資源センターの林陽平です。研究員会は、加齢研の若手研究者を主体として、研究所内外の垣根を越えた人的交流を促し、研究を活発化させる環境づくりを行っています。

研究所内交流は、生化学セミナーや集談会の発表コンテスト、そして11月に分子腫瘍学分野、家村顕自先生の幹事により第3回が行われる加齢研リトリートを通して益々活発化されることと思います。今年度の特筆すべき点は、研究員会セミナーを通じた研究所外の先生方との交流が活発化していることです。これまでに既に前年度の総数を超える5件もの研究員会セミナーが、多様な分野、所属の先生方によって開催されました。

更なる研究交流を目指して、外部の先生の招聘に加え、加齢研の若手研究者の外部でのセミナー・学会等での発表を支援する施策を立ち上げることができないかと思案しております。皆様からのアイデアやご協力をお待ちしております。

では、最近の研究員会の活動内容をご報告致します。

研究会活動内容 (H28.6~H28.11 まで)

加齢研研究会セミナー

[http://www.idac.tohoku.ac.jp/site\\_ja/news-events/](http://www.idac.tohoku.ac.jp/site_ja/news-events/)

日 時: 2016年6月3日(金) 16時~

場 所: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

講 師: 川上英良 博士

所 属: 理化学研究所統合生命医科学研究センター

演 題: 遺伝子発現から転写制御因子を予測する

担 当: 林 陽平 (医用細胞資源センター・内線 8572)

日 時: 2016年8月1日(火) 16時~

場 所: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

講 師: 幾尾真理子 博士

所 属: 徳島大学大学院医歯薬学研究部 総合薬学研究推進室

演 題: 多発性骨髄腫由来 exosome は骨芽前駆細胞の分化を抑制する

担 当: 林 陽平 (医用細胞資源センター・内線 8572)

日 時: 2016年8月26日(金) 17時~

場 所: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

講 師: 村田茂穂 博士

所 属: 東京大学大学院薬学系研究科蛋白質代謝学教室

演 題: プロテアソーム: 多彩な生命活動を支えるタンパク質分解装置のバイオロジー

担 当: 関根弘樹 (遺伝子発現制御分野・内線 8553)

日 時: 2016年9月23日(金) 16時~

場 所: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

講 師: 竹本龍也 博士

所 属: 徳島大学先端酵素学研究所・初期発生研究分野

演 題: 受精卵エレクトロポレーション法によるゲノム編集マウス作製法

担 当: 望月研太郎 (医用細胞資源センター・内線 8572)

日 時: 2016年11月4日(金) 17時~

場 所: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

講 師: 丹野悠司 博士

所 属: 東京大学分子細胞生物学研究所 染色体動態研究分野

演 題: ICS ネットワークの不安定化により引き起こされる染色体不安定性

担 当: 家村顕自 (分子腫瘍学研究分野・内線 8491)

平成28年度加齢研生化学セミナー

平成22年度より生化学セミナーは毎回2研究室, 時期は6月, 9月, 11月, 2月に行なうことになりました。

第1回生化学セミナー

担 当: 腫瘍生物学分野, 遺伝子導入研究分野

日 時: 2016年6月30日(木)

16時~17時10分

会 場: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

1. 中心体制御不全による発がん  
~中心体制御不全モデルマウスとしての Ola1 KO マウスの解析~

講 師: 腫瘍生物学分野 吉野優樹先生

2. 全身性エリテマトーデスに特徴的な免疫制御受容体の解析  
~自己抗体産生の制御を目指して~

講 師: 遺伝子導入研究分野 乾 匡範先生

連絡先: 加齢医学研究所・研究会事務局  
齋藤 内線 8576

## 第2回生化学セミナー

[http://www.idac.tohoku.ac.jp/site\\_ja/wp-content/uploads/2016/10/161027.pdf](http://www.idac.tohoku.ac.jp/site_ja/wp-content/uploads/2016/10/161027.pdf)

担当：基礎加齢研究分野，医用細胞資源センター

日時：2016年10月27日（木）

16時～17時10分

会場：加齢研実験研究棟7階 セミナー室1

1. 生殖細胞の分化／リプログラミングと代謝特性制御  
～統合オミクス解析が切り開く生殖細胞研究の新局面～

講師：医用細胞資源センター

林 陽平先生

2. 基礎研究の診療現場への貢献の一形態

～臨床医は基礎医学を期待している～

講師：基礎加齢研究分野 堀内久徳先生

連絡先：加齢医学研究所・研究会事務局  
齋藤 内線 8576

### 第146回集談会（H28.7.8）での研究会第29回発表コンテスト

今回の受賞者は白石泰之先生（心臓病電子医学）になりました。おめでとございます。表彰式は1月の新年会にて行ないます。

### 今後の予定

1. 第3回加齢研リトリート

日時：2016年11月11日（金）

場所：秋保リゾートホテルクレセント

2. 第147回集談会（2017年2月3日）での研究会第30回発表コンテスト

3. 研究会主催新年会

日時：2017年2月3日（金）

第147回集談会終了後

昨年度と同様にポットラック形式で行なう予

定です。

### 【研究会同窓会広報】

庶務幹事 高井 俊行

### 庶務報告

1. 研究会同窓会会員の確認（平成28年11月現在）

会員数 1,918名

（所内在籍者211名，所外775名（過去5年間の会費未納者は、257名で加齢研ニュースは送付しておりません。）海外88名，退会者408名，物故者267名，住所不明169名）

賛助会員 26施設

購読会員 17件

物故会員（平成28年6月～平成28年11月までの間に事務局に連絡がありました。）

高橋義郎先生 平成28年3月31日

抗研内科

藤村重文先生 平成28年5月28日

加齢研呼吸器再建 加齢研元所長

佐藤純一先生 平成28年10月5日

抗研外科

2. 第146回集談会

日時：平成28年7月8日（金）午後1時から

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジング国際共同研究センター 国際会議室

一般口演 11題

新任教授特別講演

Cognitive neuroscience of ‘self’ and its application to Smart Ageing

Motoaki Sugiura 杉浦元亮

Department of Human Brain Science, Institute of Development, Aging and Cancer, Tohoku University 東北大学加齢医学研究所

## 脳機能開発研究分野

3. 平成 28 年度加齢医学研究所研究会同窓会  
総会, 懇親会 (園遊会)  
日時: 平成 28 年 7 月 8 日 (金)  
総会 集談会終了後  
懇親会 (園遊会) 加齢医学研究所 スマート・エイジング国際共同研究センター 1 階  
ホール 午後 5 時 30 分から
4. 加齢研ニュース発行  
65 号 平成 28 年 6 月  
66 号 平成 28 年 12 月

## 今後の予定

1. 第 147 回集談会  
日時: 平成 29 年 2 月 3 日 (金) 午後 1 時から  
場所: 加齢医学研究所 スマート・エイジング国際共同研究センター 国際会議室  
第 24 回加齢医学研究所研究奨励賞, 一般口演
2. 東北大学 知のフォーラム TOHOKU FORUM on AGING SCIENCE  
会期  
第 1 シンポジウム AGING BIOLOGY  
2017 年 5 月 10 日 (水)-12 日 (金)  
第 2 シンポジウム BIOINFORMATICS & PREVENTIVE MEDICINE  
2017 年 5 月 18 日 (木)-19 日 (金)  
第 3 シンポジウム SMART AGING  
2017 年 5 月 24 日 (水)-26 日 (金)

## 会場

- 東北大学 加齢医学研究所 スマート・エイジング国際共同研究センター 国際会議室  
第 1 サテライト市民公開講座  
2017 年 3 月 25 日 (土)  
会場 東北大学片平キャンパス・知の館  
第 2 サテライト市民公開講座  
2017 年 5 月 27 日 (土)  
会場 電力ホール  
メインオーガナイザー 川島隆太 (東北大学 加齢医学研究所)
3. 第 148 回集談会  
日時: 平成 29 年 7 月第 2 週または 3 週の平日の午後  
場所: 加齢医学研究所 スマート・エイジング国際共同研究センター 国際会議室
  4. 平成 29 年度加齢医学研究所研究会同窓会総会, 懇親会 (園遊会)  
加齢医学研究所研究会同窓会総会について (平成 27 年 6 月 27 日総会にて承認。)  
\* 総会は夏の集談会 (7 月第 2 週か 3 週の平日午後) の後に予定いたします。  
日程は決定し次第同窓会員にお知らせをいたします。  
総会終了後に行う園遊会に同窓会員をお誘いいたします。
  5. 加齢研ニュース発行  
67 号 平成 29 年 6 月  
68 号 平成 29 年 12 月

## [編集後記]

加齢研ニュース 66号をお届け致します。今号では、恒例となっております、所長室便り、分野紹介、加齢研 OB の先生による随想、研究会便りをご寄稿頂きました。加えて今号では、平成 10、11 年度と加齢研の所長をお務めになられ、本年 5 月にご逝去されました藤村重文先生を偲んで、呼吸器外科学分野教授岡田克典先生に追悼文をご寄稿して頂きました。ご寄稿頂きました皆様、どうもありがとうございました。これからも加齢研ニュースが、加齢研関係者のよりよい交流の場として機能していただけますよう、加齢研ニュースにご支援、ご協力をどうぞ宜しくお願い致します。

(千葉奈津子)